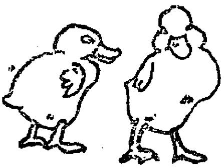

子供讃歌 六

倉橋惣三

五　保育理論研究者

1　古い書庫

明治の終、大正の初。

そのころのお茶の水幼稚園の建物は、鈍重な洋館づくりであつた。イギリス風の車寄せ張りだし屋根から玄關に上る。右が職員室、左が保育室。南の庭と北の小使室を通ずる細い廊下があつて、その奥は保育室が三つ南側につゞく廊下の北は窓越に樹木のはえしげつた古庭が見え、突きあたりは南と北にきれる廊下をへだてて、廣い遊嬉室（當時はそういう木札がかゝつていた）その遊嬉室は長方形二方窓の廣い部屋。南が遊園だが、すべての部屋は直接に庭へ出られず、從つて腰高の窓をへだてゝ光線がはいる。或る雪の降る日その遊嬉室で講演をしたことがあるが、うす暗い氣がしたのを覺えている。正面に古い黒塗ピアノ、壁に古いフレーベルの肖像額、すべてもの〳〵しい。

遊嬉室の北隣りが書庫になつていた。光線の入りかたの惡い部屋で、本の古い香がこもつているが、さすがに明治以來の古典古書類が一ぱいつまつていた。

東大の大學院生活をつゞけていた彼が、圖らず東京女高師の講師を囑托せられたのは明治四十三年のことだつた。特に年代をしるすのはそのころの保育界の時代をおぼえてをくためである。就職のために人にたのんだことのない彼は、たれの推せんによつたものかしらないが、時の幼稚園主事は安井哲子氏、學校長は中川謙二郎氏であつた。

若い講師は女高師の上級生に毎週兒童心理學の講義をするほかは、別にいいつけられることもなく、勝手に附屬幼稚園にいりびたつた。一高生以來遊びながら通いつゞけた幼稚園だけれど、天下はれての木戸御免となれば、自然一層遠慮がないというもの、安井主事とは以前からの知合でもあり（或は推せんも同女史だつたのかもしれない）幼稚園研究の便宜はふんだんに、自由にあたえられた。

從來から始終幼稚園にきていたが、子供と遊ぶのをたのしんだ時代、あとでは兒童研究のための時代で、幼稚園研究とか、保育理論とかいうことは、彼の別段興味をもたないことであつた。つまりひとり〳〵の子供のあつまつている處というだけで、幼稚園といういれものや、何のために、そのいれものへ子供を集めるかというようなことは無頓著であつたのである。今から考えるとおかしなようなことでもあるが、幼稚園を主にして子供をあとにしてその對象とかにするというくせが、初めからつかなかつたためには幸でもあつた。

併し、前記の廊下の突きあたりの古い書庫は彼の興味をそつちへさそわずにはいなかつた。彼はひまのあるのをいゝことにして、その古書の間に入りびたつて、片つ端からよみあさつた。後に彼がロンドン留學中、國立敎育調査所の書庫にたてこもつて英國敎育制度の變遷をしらべた時と共に、彼として二大書庫詰め生活である。

その古い書庫にあつたものは、みんな明治初年からの保育書類である。その中には、明治九年版の桑田親五譯『幼稚園』同じく明治九年版の關信三譯『幼稚園記』明治十二年版の『幼稚園法二十遊嬉』をはじめ、當時からの古い筆寫本がつみかさねられてあつた。それらはみな、美濃紙和とじ本の古雅な體裁で、幼稚園という字にをさなごのそのとふりがながつけてあつたり、フレーベルを布列別氏と書いたり、幼兒と書かず稚兒と書くといつた風でいとどいにしえぶりゆたかに、處々虫くいさえある。この幼稚園が創められたころの文敎の姿を追憶させるものであつた。これらの古版本はいづれも今にして、貴重な珍品であるが、それよりも當時の若き保育研究生、後の豊田英雄老女史や、同じく當時の若き女生徒、後の氏原女史（膳たけ女史の姉君）などの保育講義の手錄や、保育敎材の筆寫の類は、一層珍重すべきものであつた。

彼はこれらの虫喰い本をよみふけるにつれて、どうしてもその原典に入らずにはいられない。彼が、フレーベルの原典ととりくみはじめたのはこの時である。その當時幼稚園にあつた保育洋書類は、フレーベル原典やその英譯本、新らしいところで、初期米國本があるくらいで、この時代の保育研究は後の言葉でいえば『フレーベリヤン　オルソドキシー』にかぎられていたのであつた。彼はフレーベルの神秘主義哲學をシェリングにさかのぼり、またフレーベ

ルの大ざつぱな生物科學的考え方を、その據りどころ オーエンに（獨逸生物學者）もとめたりして、苦鬪した。この間勿論『人間の敎育』や『母と子の遊戯の歌』や恩物に關する幾多のコンメンタリーによつてこの偉大なる敎育天才フレーベルの幼兒敎育の精神と創意とに深く感嘆したことはいうまでもない。彼は後アメリカで、若い保育論者と語るたびに、新保育論の結論に於ては一致しても、彼等にフレーベルの基本研究をしていないもののすくないのには頗る敬意を感じ難かつた。

序に念のためしるしておくが、この鈍重なる建物と古い書庫とだけから當時のこの幼稚園の保育内容と推定してはならない。安井主事は英國がえりの新らしい着眼を以て、種々の改革を實行していた。その物靜かな中に。徐々に行なわれてゆく新らしいことには、彼も陰乍ら感服していた。幼兒にうたわせる歌などに古くさいものからあらためられたのもすくなかつたと思う。恩物は、大昔ほどではないが行なわれていたらしかつたけれども自由遊びの尊重は十分行なわれていた。又小さいことでは、幼兒の辨當いれとして、バスケット（空氣の通るために）を用いはじめたことや、園内でエプロンを用いることなども、安井主事の創案であつた。明治九年創立というこの幼稚園も古いいわれだけにとどまつていたのでは決してない。

2 フレーベリヤン オルソドキシーに對する疑惑

書庫で古本の讀みあさり、倦きては遊園で子どもらと遊び。その庭は明るくて、四季の風が動く。子どもらは、ピン〳〵と活きている。彼の頭は、傳統と新鮮との二つの境にゆるがざるをえない。フレーベルの根本精神はこの庭でも、或は庭でこそより多く眞に活躍するが、フレーベル流の保育方法のこまかい仕方はどうも庫の中に殘る 彼は保育の實際には、もとより手を出さないが、保育室のなかにはいつて見學することとは講師になつてからずつとふえたこの時、若しこの幼稚園が、ほんとうに頑固なフレーベリヤン オルソドキシーであつたら、彼はそれにとらえられたかもしれない。その反對にもつと近代的なものであつたら、疑問も心に起らなかつたかもしれない。そういつてはなんだが、當時の中途半端的なところが批判の對象になつた。――彼にフレーベリヤン オルソドキシーに對する疑惑がきざし來つたのである。

後で知つたことであるが、アメリカでフレーベリヤン オルソドキシーに對する疑の先づ起つたのは、あの風光明透なカルフォルニヤ海岸のサンタ・バルバラ幼稚園の若い保母さんの間であつた。そこには、砂と小石と草花をもつ

て、ゆたかに自然敎育をうける子ども達がいたのである。この幼稚園でも、子供達は砂や小石や木の葉でよく遊んでいた。若い彼にフレーベリヤン　オルソドキシーに對する疑惑が起つたのは、理屈もないあたり前のことであつたのである。たゞ一方で、フレーベルの恩物論に讀みふけり、殊にその多くの傳統的註釋本に、理詰されていた彼としては、この疑惑についてサンタ・バルバラのお孃さんたちのように氣樂ではいられなかつた。

そのうち彼は、東大の圖書館で、豫て兒童心理研究のために讀みつゞけていた、ペデ・セム（Pedagogical Seminary）のなかで、クラーク大學の若き學徒、エッビーの幼稚園改造論を見つけた。論文はこの雜誌の性質上、スタンレーホールの息のかゝつているものに相違ないが、若い學徒の淸新な、キビ〳〵とした筆致は、フレーベリヤン　オルソドキシーの疑惑に走つている彼の心に、活をいれた。

臆病というか、おとなしいというか、彼はその胸に、萠えあがる革新觀を保育室の中えはもちこまなかつた。然し遊園の自由遊びが彼にとつて幼稚園の眞面目になつた。この時、スタンレーホールの新幼稚園もまだなかつたし、モンテッソリーの名も、デュエーの名ももとよりなかつた。氣取つていえば、彼は、いつものように、こどもの自然だけから敎えられていたといつていい。

彼のフレーベル研究はもとよりやまなかつた。フレーベルはそんなちよこ〳〵とかたづくものではない。然し彼が書庫を出て、子どもたちと本校の草原の方へゆくことは、著しくふえて來た。先生たちもそれを是認したし、子どもたちは勿論大よろこびであつた。もうにいちやんでなく、兎に角く先生である彼もそれを一番樂しんだ。

彼がこうして幼稚園をたのしんだり疑つたりしている時に、外はどうであつたのであろうか。外といつても全國にわたつてのことは彼には少しもわからない。東京内として一口にいえば、たゞこれそれ〴〵の傳統に從つてなごやかなものであつたらしい。ミッションの幼稚園では、アメリカ（古い）輸入の相當嚴密なフレーベリヤン　オルソドキシーであつたらしいが、市内一般の公私立幼稚園は、お茶の水幼稚園がそうである如く、なまぬるいお湯をわつたフレーベアヤン　オルソドキシーというところであつたようだ。大學には保育を論ずる學者はいないし、在野の子供黨には尊敬すべき人々があつたが、兒童心理學者か童話の達人か敎育常識人かであつて幼兒敎育學者ではなかつた。何かの會で人々の傾聽する講演といえば、幼兒德育談か、一般兒童心理學か、兒童保健學かであつた。彼は保育理論プロパアーに就て敎えを乞うべき人をどこにも求め得なかつた。兒童心理研究は保育界に缺く可からざる基礎要件で

あるが、心理學が卽敎育學でないことはもとよりで、當時のかげのうすい保育論では敎育哲學なしの心理學にたよつていたといつてい丶時代であつたかもしれない。

とにかく彼は思うこと疑うことを誰にきいてもらいようもない、あわれなよるべない保育理論研究者であつたのである。

但し、こうしている間に、彼の幼稚園に對する興味は、ぐん〱とつよまつていつた。

3　フレーベル會機關誌「婦人と子ども」の編集

彼は女高師附屬幼稚園にあつた保育の研究會「フレーベル會」から出していた月刊「婦人と子ども」の編集をひきうけた。「フレーベル會」は後に「日本幼稚園協會」に「婦人と子ども」は後に「幼兒の敎育」に後年彼が改名したものである。この雜誌は明治三十年代頃の創刊で、極く上品なものであつたが、全く同情寄稿によるもので、彼は月々の原稿を集めるのに苦心した。そこで彼が自分で書かなければならないことが多く、時にはいろ〱の變名で一冊全部をうづめたこともあつた。それもい丶が、保育界の新參者として、書く可き材料の貧弱なのには困つた。編集者ともなれば、保育の何等かの主張位はもつていなければならぬ筈であるが、その點前に述べた通りで心細い。殊に敎育は實際經驗なしには語るべきものではない、といふ彼の若い信條から、たかだか、應用兒童心理學位のものしか書けない始末だつた。

然し、この雜誌に關係することによつて、保育界の人々に接する機會も多くなり、多少は廣く、全國の保育界の傾向や、動靜を知る機會をあたえられたことは、彼にとつてどんな幸であつたか判らない。當時は全國各地に、まだそう多くの保育會は出來ていなかつたが、その中で、京都、大阪、神戶の三市聯合保育會が活潑なことは、年々の報告で知られた。卒直にいつて、東京の保育界の保守的に靜かなのに比して、關西こそわが國保育の中心であるような感もあつた。東京でも、わづかに、フレーベル會例會が、月々開かれ、又、夏期講習が催されたりして、それ相當の、地味な歩みはつゞけられていたのであるが、何分、大きな東京のなかの、小さな幼稚園界というふうを免れなかつた。その證據には、例會や、講習の講師として、かけだしの若い彼が、しば〱ひきだされたことでもわかる。

ついでながら、そのころのことで、彼のいつまでも忘れられないことを一つ書かして貰う。――或る日のフレーベル會例會で、彼が家庭敎育を題目として講演したことがある。何を語つたかすこしも覺えていないが、たぶん例によ

つて、通俗兒童心理學に、敎育的空想と加えたようなものであつたと思う。その講演を、安井哲子氏や、野口幽香子氏も聽いていてくれたのであるが、講演後此二人のおばさん聽講者が、ニコ〳〵と彼にいつた言葉はこうであつた。「今日はいゝおはなしでしたね。だが、あなたが、お父さんになられてから、もう一度、おんなじお話を、うかゞいたいものですね……」

これは、もとより皮肉でも何でもない、あたゝかいことばであるか、彼にとつては、相當にその意味をかみしめさせられる言葉であつた。というよりも、後になつて、いよ〳〵その味がわかつた言葉である。彼は、ずつと後年、家庭敎育の問題について、深い關心をもち、常に幼兒敎育と並べて、彼の研究題目にしていたが、幼兒敎育の方はとにかく、家庭敎育について、まだまとまつた著述をしない。人にすゝめられても、自分の子を、一應の學校敎育を終えさせ、結婚させ、つまり、一通り、親の經驗を、たどらないうちは、家庭敎育のことは、ほんとうには論ぜられないと思つて、筆を、おさえて來た譯であつた。保育理論の研究は、それに必要な、學問の一通りといくらかの保育實際の研究とても、何かしら、いえるものであろうが、家庭敎育は、親としての實經驗なしには、眞實を語れるものではないというのが、彼の信念（？）であつたからである。そしてこれが、安井、野口兩女史の、じようだんまじりの、然も好意にみちた、あの時のことばの賜物であつたことを彼は忘れない。――いつでも、思いがけない處で、敎えられて來た彼である。感謝すべきである。